

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00550

研究課題名（和文）機能的視点によるドイツ語動詞派生形態素の通時的研究

研究課題名（英文）A diachronic study of German verb derivational morphemes from a functional perspective

研究代表者

黒田 享（Kuroda, Susumu）

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：00292491

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツ語において動詞以外の語から動詞を作る（派生）際に使われる様々な要素（形態素）の働きの変化を9世紀以来のドイツ語文書に現れる用例に基づいて分析した。また、ドイツ語の歴史において複雑な構造を持つ動詞の分布が変わるいくつかのパターン、そしてそうした各種のパターンが見られる環境を捉えた。ドイツ語が新しい単語を生み出す際の規則性を捉える方法を確立できたことで、今後、他の言語との差異や共通点、ひいては人間の言語における新しい単語の形成方法の解明にも繋がらう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

欧米では新語形成のあり方が言語学（理論言語学・歴史言語学）で脚光を浴びようになって久しい。本研究ではこの分野の研究に取り組み、国外でも成果を公表することで国際研究ネットワークを形成できたため、我が国の言語研究の国際的プレゼンスの向上につながることを期待できる。研究では現在の言語研究の主流となるインターネット上の大型電子コーパスを用いることで従来の印刷媒体に頼る研究では解明が容易でない現象を捉えることができた。また、こうした手法は将来のコンピューターを利用した言語研究にも繋がらうもので、社会的にも様々な応用可能性があるだろう。

研究成果の概要（英文）：The changes in the function of the various elements (morphemes) used to coin verbs from non-verbs (derivation) in German were analyzed on the basis of examples from German texts since the 9th century. Additionally, the study captured some of the patterns of change in the distribution of verbs with complex structures in the history of the German language and the environment in which these patterns are observed. Having established a method for capturing the regularities in the coining of new words in German, the results of the study may in the future lead to an understanding of the differences and similarities between German and other languages and of how new words are formed in the human language.

研究分野：言語学

キーワード：言語史 通時言語学 形態論 語形成論

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語では様々な派生形態素を用いて動詞・名詞・形容詞などから動詞が形成されるが、派生形態素ごとに固定した機能があるわけではなく、同じ機能を持つ複数の派生形態素が併存する。例えば **wohnen**「住む」→**bewohnen**「～に住む」と **sprechen**「話す」→**ansprechen**「～に話しかける」はどちらも自動詞からの他動詞の形成だが、前者の例では強勢を持たない接頭辞（いわゆる「非分離接頭辞」）**be-**が用いられている一方で、後者の例では強勢が伴い、主節では動詞基体と離れて用いられる接頭辞（いわゆる「分離接頭辞」）**an-**が用いられている。また、名詞から動詞を派生する場合、**Schriftsteller**「作家」→**schriftstellern**「作家活動をする」のように接頭辞を用いない場合がある一方で、接頭辞を伴う場合もある。その際にもやはり、強勢のない接頭辞を使う派生（**Waffe**「武器」→**bewaffnen**「～を武装する」）と強勢を伴い、動詞基体と分離することがある接頭辞を使う派生（**Tisch**「机」→**auftischen**「～を食卓に上げる」）の両方がある。

こうした「自動詞の他動詞化」や「名詞の動詞化」のような派生の類型は、ドイツ語語形成研究では1970年代から「機能領域 (Funktionsklasse)」と呼ばれ、基体要素が受ける統語的・意味的操作のパターンに応じて整理されている。その上でどのような機能領域があるか、個々の機能領域で用いられる派生形態素にはどのようなものがあるか、同じ機能領域における個々の派生形態素の相互関係のあり方などについて議論がされてきた。

研究代表者は平成10年頃からドイツ語の動詞派生の通時研究に取り組んできていたが、いくつかの機能領域における古高ドイツ語(750～1050年)期から現代までの接頭辞の相互関係の変化を捉え、内外の媒体を用いて成果を発表し、関連研究者との議論を進めていた。こうした背景から、ドイツ語動詞派生形態素の働きを総合的に捉える研究を着想した。

2. 研究の目的

本研究の基本的な目的は、ドイツ語の動詞派生形態素体系の変遷の全体像を探ることで、これによりドイツ語の通時的語形成研究に貢献することをねらった。中心的な研究対象はドイツ語だが、研究の過程では語形成研究一般や言語類型論の枠組みでの語形成研究の知見も参照し、ドイツ語以外の言語の研究にもつながる成果を得ることを目指した。研究の上で特に重点を置いたのは次の点である。

(1) 機能領域を研究の基本単位とし、従来の研究では解明されていない点が多い古高ドイツ語の動詞派生形態素の機能的体系を捉えること。これを踏まえることで、9世紀以来のドイツ語の動詞派生体系の機能的変遷の全体像を示すことができるようになる。

(2) 古高ドイツ語以来の動詞派生形態素の機能を包括的に捉えること。研究代表者の研究開始以前の研究では、いくつかの機能領域における派生形態素体系の変化が明らかになった。例えば、「自動詞の他動詞化」機能領域では強勢がある接頭辞の付加(**sprechen**→**ansprechen**など)が、「名詞の動詞化」機能領域では接尾辞の付加(**Waffe**→**bewaffnen**など)が急速に発達している。これら以外の機能領域においても派生形態素の相互関係の通時変化を解明することで、ドイツ語における動詞派生の変遷が包括的に明らかになる。

(3) 近代まで標準語が確立しなかったドイツ語には地域差が顕著に見られるが、通時的な変遷も視野に入れる。また、動詞からの名詞派生(**verwalten**「管理する」→**Verwalter**「管理者」/ **Verwaltung**「管理」のような派生)や、ドイツ語以外の言語の動詞派生の変遷との共通点と差異も参照し、ドイツ語派生形態素の機能的変遷の特徴を明確に示すことをねらった。

(4) 研究の基礎資料はインターネット上で提供される大規模電子コーパスから採集する。これは現代の通時的語形成研究ではすでに主流となっている方法だが、古高ドイツ語への適用例は研究計画立案時には極めて少なかった。また、近年の語形成研究では語の内部構造に焦点を当てる「語統語論」や「構文形態論」などの枠組みによる研究が盛んになっている。本研究の目的は、こうした最近の研究の知見を古高ドイツ語の語形成研究に適用し、新しい知見を得ることにあった。

3. 研究の方法

上記のような目的に意識に基づき、本研究では次のような方法を採用した。

(1) 古高ドイツ語の語形成についての先行研究を参考に調査対象となる動詞派生形態素と動詞を確定し、その用例を大規模コーパスに基づいて採集する。採集した用例はデータベース化し、動詞派生形態素の語構造上の役割や文法的性格、派生に伴う意味的(語彙的・文法的)・統語的(項構造や品詞の変化など)操作、年代・地域区分などの観点から整理する。

(2) 用例データベースに基づいて古高ドイツ語の各種動詞派生形態素の機能を観察し、機能領域別に(必要に応じて細分化した上で)分析する。その際、基体要素・派生形態素の性質と分布の関係や用例の頻度に着目し、機能領域ごとの古高ドイツ語動詞派生形態素の分布を整理する。その上で中高ドイツ語以降の状況と対照し、古高ドイツ語から現代ドイツ語までの動詞派生の変遷を俯瞰的に捉える。

(3) 上記の研究を踏まえ、ドイツ語の地域差や中世ドイツ語文書の歴史的背景についての知見も援用しつつドイツ語動詞派生のあり方の変遷を捉えなおす。動詞から名詞を派生する形態素についても古高ドイツ語以来の機能的変遷を捉え、動詞派生形態素の場合と比較する。その際は言語類型論の枠組みでの語形成研究における議論も参照する。

4. 研究成果

(1) 研究成果・研究手法の学術的な位置付け・インパクト・展望

本研究の研究期間において、国外では大規模コーパスを用いた古高ドイツ語語形成に関する研究が数多く発表された。このことは本研究の問題意識が国際的に共有されていたことを示すとともに、本研究のアプローチが世界的なドイツ語語形成研究の流れに沿ったものであることを表す。本研究は世界的な新型コロナウイルスの流行という状況のため当初計画通りに進めることができなかったが、流行前や流行のある程度の沈静化の後には研究成果を国内外の関係研究者と共有し活発に議論しており、今後のドイツ語語形成研究にも広く寄与することが見込まれる。

本研究では計画に沿ってインターネット上で提供される電子コーパスを利用したが、質・量の点で一定の信頼性が認められ、ドイツ語研究の基礎資料として広く受け入れられているものを用いた。中世ドイツ語については *Referenzkorpus Altdeutsch* と *Referenzkorpus Mittelhochdeutsch*、近世・近代ドイツ語については *Deutsches Textarchiv*、現代ドイツ語についてはマンハイムドイツ語研究所 (*Institut für Deutsche Sprache Mannheim*) が提供する各種のテキストデータベース、そして *Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache* を利用した。また、研究の過程における関連研究者との議論を通じて近年の計量言語学の知見も参照し、「生産性」の問題にも配慮する（もともと、中世ドイツ語の研究においては十分な規模の基礎データが得られないため、計量言語学の手法を援用することには限界があることも明らかになった）ことで現代の言語研究で要求される水準の調査を行い、従来のドイツ語史研究では捉えられていなかった様々な現象を明らかにできた。

当初の計画通りに研究が進まなかった点もある。中世ドイツ語の分析の際は、用例の採集源であるテキストの文化的背景やテキスト成立地域の差も踏まえることを計画していた。だが、研究の過程で計量的に説得力ある知見を得るためには一定上の規模のテキストを分析する必要があることが判明した。古高ドイツ語の場合、そもそも現代まで残されているテキストの量が限られる上、断片的なものも多く、分析の上でテキストの文化的な性質や地域差を十分に考慮することが難しい。そのため、計量言語学的視点を優先することとした。それでも、言語作用域 (*register*) との関連についてはある程度の知見が得られたため、今後の研究に活用することとした。

(2) ドイツ語動詞派生形態素の変化に関する知見

ドイツ語の動詞派生に用いられる形態素の働きについては、従来の言語研究でも一定の議論が行われている。特に通時的な変化については19世紀以来の議論の蓄積もある。そうした研究状況を背景に、近年の語形成研究で注目されるようになった様々な現象（いわゆる「ゼロ派生」の位置付け、外適応 (*exaptation*) や分泌 (*secretion*)、脱文法化 (*degrammaticalization*)、再動機付け (*remotivation*) など) を視野に入れつつドイツ語動詞派生形態素の機能的変化を観察した。分析においては、従来の研究で重点が置かれることが多かった意味的機能変化だけでなく統語的機能変化にも目を向け、語形成研究上の新たな知見の獲得をねらった。

本研究はドイツ語動詞派生形態素の機能について体系的に観察することを目的とする、基礎研究的なアプローチを取ったものだが、その過程でいくつかの特徴的な変化現象も突き止めた（これらについては口頭発表や研究論文の形で適宜公開し、関係研究者との議論に供した）。本研究で得られたいくつかの知見をまとめると次のようになる。

① 語形態の通時的複雑化傾向

ドイツ語の語形成の通時的研究においては、同じ内容を表す語が派生語に移行する（構造が複雑化する）傾向があると言われることがある。何かを付与することを表す「装備動詞」形成の機能領域については接辞を加えず名詞から動詞を派生することがあるが (*Farbe* 「色」 > *färben* 「色をつける」など)、接頭辞を用いる (*Gitter* 「格子」 > *vergittern* 「格子をつける」など) 場合が目立つ。古高ドイツ語・18世紀のドイツ語・現代ドイツ語のコーパスを調査したところ、接頭辞を伴う「装備動詞」は古高ドイツ語 (*dah* 「覆い」 > *decken* 「覆う」など) 期から見られるが、時代が下がるにつれてその頻度が実際に高まることがわかった。他方、何かを用いた動作を表す「道具動詞」については古高ドイツ語 (*wisc* 「藁束」 > *wiscen* 「拭く」など) 期から現代ドイツ語 (*Flöte* 「フルート」 > *flöten* 「フルートを演奏する」など) に至るまで接頭辞を伴う動詞の比率が一貫して低い。名詞からの動詞の派生については、語形態の通時的複雑化傾向が存在すると言えるが、それは押し並べて見られるわけではなく、機能領域ごとに異なる通時的変化があると考えられる。

② 派生形態素の機能希薄化

ドイツ語の動詞には形容詞から派生されたものがある (*kühl* 「冷たい」 > *kühlen* 「冷やす」など) が、中高ドイツ語でも同様である (*heil* 「健康な」 > *heilen* 「健康にする」など)。形容

詞が接尾辞-igを伴うものの場合、それを基体とする動詞は-igenで終わる(schuldec「罪がある」>schuldigen「罪を負わせる」など)。形容詞を派生する接尾辞は-igに限らず、さまざまなものがあるが、コーパス調査を行ったところ動詞形成の基体になる派生形容詞は-igを伴う場合が特に多いことがわかった。これは古高ドイツ語ではそれほど顕著にみられない状況で、中高ドイツ語において有接尾辞形容詞からの動詞形成における-igを伴う形容詞の優位性が確立したと考えられる。-igを伴う形容詞がなくとも名詞から-igenで終わる動詞を派生することが可能である(Pein「苦痛」>*peinig>peinigen「苦しめる」)ことから、-igenが動詞を派生する形態素として確立したと考えられるが、接尾辞-igの動詞形成との高い親和性の背後にはその本来の機能の希薄化があり、それが中高ドイツ語期に確立したと言えるだろう。

③派生要素の分布変化

同じ機能領域の派生語であっても、その形成に用いられる形態素は一つに限られない。だが、コーパス調査により複数の派生形態素が均質に分布するわけではなく、機能領域ごとに顕著に用いられる派生形態素があることが確認できた。動詞派生とは逆パターンの語形成である動詞からの行為名詞(動詞の行為自体を表す名詞)派生については、-de、-nis、-t、-ungなどの形態素が用いられるのが現代ドイツ語の状況だが、このうち-ungの果たす役割が特に大きい。だが、古高ドイツ語・中高ドイツ語コーパスを用いて行為名詞形成の通時的変化を調査したところ、古高ドイツ語では-ung(îlen「急ぐ」>îlunga「慌ただしさ」など)よりも-deに対応する形態素(-ida)を伴う名詞の方が目立ち(intfrâhên「問う」>antfrâhida「問い」など)、分布の変化が認められる。名詞派生については動詞派生と異なり接尾辞の役割の重要度が高く、語幹形成による動詞からの名詞派生との関係も視野に入れることが必要だろう。また、名詞と動詞の双方が、語の後部音節の弱化という音韻変化の影響を受けているため、今後はこうした通時的な変化と派生形態素の機能変化との関係も改めて調査する必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 黒田 享	4. 巻 55
2. 論文標題 ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史的変遷: -ungの機能領域はどう拡張したか	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	6. 最初と最後の頁 33-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田 享	4. 巻 54
2. 論文標題 動詞の構造複雑化傾向について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	6. 最初と最後の頁 63-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kuroda Susumu	4. 巻 4
2. 論文標題 Funktionsabspaltung des Suffixes -ig beim Verbbildungsmuster mit -igen	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Zeitschrift fuer Wortbildung / Journal of Word Formation	6. 最初と最後の頁 7~25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3726/zwjw.2020.01.01	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒田 享	4. 巻 別冊 (特集号)
2. 論文標題 ザンクト・ガレンのノートカーとドイツ語 - 言語ディアスポラとしての修道院 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 武蔵大学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 63~76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田 享	4. 巻 51
2. 論文標題 ドイツ語転換動詞の類型と形成の相互関係についての試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	6. 最初と最後の頁 31-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 黒田 享
2. 発表標題 接尾辞 -ung の分布変化 中世ドイツ語訳ベネティクト戒律に基づいて
3. 学会等名 日本独文学会秋季研究発表会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Susumu Kuroda
2. 発表標題 Deverbale Substantivbildung im Althochdeutschen
3. 学会等名 Sprachhistorisches Kolloquium, Humboldt-Universitaet zu Berlin
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒田 享
2. 発表標題 派生動詞の構造複雑化と分布変化
3. 学会等名 日本独文学会春季研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Susumu Kuroda
2. 発表標題 Formale Entwicklung der ornativen Verben
3. 学会等名 Die Sprache in ihrem Werden (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒田 享
2. 発表標題 中高ドイツ語における有接尾辞形容詞からの動詞形成
3. 学会等名 日本独文学会秋季研究発表会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 井出 万秀、川島 隆 (編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 276
3. 書名 ドイツ語と向き合う (p.125-145 「愛郷者オトフリート」を担当)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------